「風の音」

菜の花の
残る川辺に
母と歩む

KHJ岡山さくの会　”ふじさん”

まえがき

　この物語は、言葉にならない想いと、静かなつながりをめぐる旅です。母と娘―ふたりの間に流れる沈黙や距離は、決して断絶ではなく、風のように、見えないけれど確かに存在する縁でした。俳句という短い言葉の中に、娘は自分の世界をそっと閉じ込め、母はその世界に触れようと、静かに手を伸ばしていました。「風の音」は、そんなふたりの歩みが、少しずつ重なっていく物語です。読んでくださる方の心にも、静かな風がそっと吹くように。

目　次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １

1. 期待と焦燥の朝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

2. 記憶の中の「風の音」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３

3. 拒絶としての沈黙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

4. 誰にも聞かれぬ句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

5. 縁が動き出す匿名作品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

6. 外へと歩み出す言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

7. 沈黙の中の和解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

8. 並んで歩くという縁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

1. 期待と焦燥の朝

朝、娘の作品が載った新聞の切り抜きをバッグにしまうとき、母の指先が少し震えた。何度も折り目をつけた紙は、もう角が擦れて白くなっている。「今日こそ、ちゃんと伝えられるかしら」そう思いながら、娘の部屋をそっと覗く。彼女はまだ寝たふりをしている。声をかけると、無言で起き上がる。その沈黙に、母は慣れてしまっていた。家族会は母にとって「希望の場」だったが、娘にとっては「見られる場」だった。その一縷の願いを、母は胸にしまって、玄関の鍵を回した。

2. 記憶の中の「風の音」

まだ娘が小学生だった頃。夏休みの終わり、台所の隅で、娘が墨をすっていた。小さな硯に水を落とす音が、静かな午後の空気に溶けていく。「なんで字を書くの？」と母が聞いたとき、娘は少し考えてから言った。「音がしないから、静かでいい」その言葉に、母は少しだけ胸が痛んだ。筆を持つと、娘は自分の世界に入っていくようだった。その日、娘が書いたのは「風の音」という二文字だった。母は、それを冷蔵庫に貼った。この記憶が、今の母の行動の根っこにある。

3. 拒絶としての沈黙

居場所に集まった母親たちの空気感が、からだにまとわりつく。娘はみんなのテーブルにはつかず、後ろの壁際にあるソファーに一人で座っている。母が新聞の切り抜きを配っている。あの俳句が載ったやつ。「またか」と思う。嬉しくないわけじゃない。でも、見られるのは苦しい。母の誇らしげな笑顔の奥に、何か焦りのようなものが見える。それが、もっと苦しい。「すごいですね」「才能ありますね」そんな言葉が飛び交うたびに、体が硬くなる。誰かの視線が自分に向いている

気がして、娘は立ち上がる。「帰る」母は驚いた顔をしたけれど、すぐに後を追ってきた。帰り道、二人とも何も話さなかった。

4. 誰にも聞かれぬ句

帰り道、二人とも何も話さなかった。でも、娘の頭の中には、あの言葉が浮かんでいた。

風の音 誰にも聞かれず 春を越す

それは、数日前に書いた句だった。誰にも見せるつもりはなかった。でも、今、その言葉だけが、自分の中で静かに鳴っていた。この音が、自分の中にあることだけで、今日は、なんとか歩いて帰れる気がした。

玄関の鍵を回す音が、やけに大きく響いた。娘は靴を脱ぐと、何も言わずに自分の部屋へ向かった。母は声をかけることができなかった。テーブルの上に残った新聞の切り抜きをそっと畳んで、引き出しにしまった。その夜、娘の部屋から、紙をすべる筆の音が聞こえた。母は耳を澄ませる。その音は、風のように静かで、でも確かに、そこに生きていた。

5. 縁が動き出す匿名作品

数日後、母がいつものように近所の図書館に立ち寄ったときのこと。入口の掲示板に、地域の俳句作品が数点、展示されていた。その中に、見覚えのある句があった。娘がまだ見せていなかったはずの句だ。その下に添えられた小さな文字を読んだ。「匿名投稿作品。選者より—静かな孤独の中に、季節を越える命の気配がある。誰にも聞こえなくても、確かにそこにある音を、私は受け取った。」母は、胸の奥がじんわりと熱くなるのを感じた。娘自身が選んだ距離と方法で、世界に触れていたのだ。その夜、母は何も言わずに、冷蔵庫の古い「風の音」の紙をそっと外した。代わりに、図書館で見た句を、手書きで書き写して貼った。娘は何も言わなかった。でも、翌朝、冷蔵庫の前で少しだけ立ち止まっていた。

6. 外へと歩み出す言葉

冷蔵庫の前で立ち止まった朝。貼られていた句を見て、娘は少しだけ眉をひそめた。母の字だった。でも、誰かが受け取ってくれたことに、少しだけ呼吸が深くなった気がした。その日、娘は筆を持った。書いた句を、机の上に**置いたまま**にした。母が通りかかっても、目に入るかもしれない。それでもいいと思った。数日後、母がその句をそっと拾い上げて、何も言わずに机の隅に飾った。次の句も、また机の上に置いた。言葉が、少しずつ外に向かって歩き始めていた。

春の終わり、図書館の小さな句会に、娘は一人で足を運んだ。母には何も言わなかった。でも、玄関を出るとき、母はそっと「いってらっしゃい」と言った。その言葉が、背中を押してくれた気がした。娘は今日の句を、投稿用の箱にそっと入れる。

芽吹き待つ 声なき声の 土の中

今日は少しだけ、誰かに届いてほしいと思った。その「少しだけ」が、娘にとっては大きな一歩だった。

7. 沈黙の中の和解

図書館の句会で選者を務めていた女性は、娘の句に、言葉以上のものが宿っているのを感じていた。数日後、図書館の掲示板にその句が貼り出された。娘は、それを見に行った。掲示板の前で、一人の年配の女性が微笑んだ。「この句、好きです。私も、昔は声が出せなかったから。」娘は何も言わなかったが、心の中で何かがほどけた気がした。言葉は、届いていた。

夕方、食卓に並べた湯呑みに、娘が静かに座る。母は、何を話せばいいのか迷ったが、娘の方からぽつりとつぶやいた。

「…あの句、見た人が、好きって言ってくれた。」

母は、箸を持つ手を止めた。娘が、自分の句のことを口にしたのは、初めてだった。

「そう…よかったね。」

それだけしか言えなかったけれど、その言葉には、たくさんの想いが込められていた。娘は、少しだけうなずいた。湯気の向こうで、春の終わりの光が、ふたりの間に差し込んでいた。

8. 並んで歩くという縁

食事のあと、娘は自分の部屋に戻った。母と交わした短い言葉が、胸の奥で静かに響いていた。ずっと張りつめていた糸が、少しだけ緩んだような。今は、言葉が出てくるのを、急がなくてもいいと思えた。

日曜の午後、母と娘は並んで歩いていた。川沿いの道には、菜の花がまだ少し残っていた。娘は、母より半歩後ろを歩いていたけれど、ふとした瞬間に、歩幅が重なった。

「…あの句、冷蔵庫に貼ってくれてたね」

娘がぽつりと言った。母は少し驚いた顔をしたけれど、すぐに笑った。

「うん。好きだったから。」

橋の上で、ふたりは立ち止まった。娘は、ポケットから小さな紙を取り出し、母に手渡す。そこには、今日の句が書かれていた。

菜の花の 残る川辺に 母と歩む

母はそれを受け取って、静かに読んだ。言葉は、風のように、ふたりの間を通り抜けていった。

そして、残ったのは、並んで歩くという、それだけで十分な「つながり」だった。

あとがき

「風の音」は物語のはじまりから終わりまで、娘の内面に流れていた静かな存在であり、誰にも聞こえなくても、確かにそこにあるもの。

物語の終わりに、ふたりは並んで歩いていました。それは、言葉を交わすよりも深い、ひとつの答えだったように思います。娘の句が誰かに届き、母がその変化を見守る―その過程には、焦りも、迷いも、祈りもありました。でも、風の音のように、すべては静かに流れ、やがて、ふたりの間にやさしい余白が生まれました。

この物語を通して、誰かとの距離や沈黙が、必ずしも孤独ではないことを感じてもらえたら嬉しいです。そして、言葉にならない声が、いつか誰かに届く日が来ることを、そっと信じていたいと思います。

令和７年１１月

KHJ 岡山きびの会　　“ふじさん”